



会誌編集の醍醐味

森川 治美

I. はじめに

近畿病院図書室協議会（以下、協議会という）の会誌である「病院図書館」は、協議会会員機関の担当者により企画編集され、発刊23年を経ている。そのうちの約6年間、編集部員として直接編集に携わり、「病院図書館」を通じて私なりに味わった編集の醍醐味を述べてみたい。

II. 「病院図書館」の記事内容

最近の「病院図書館」の記事内容を紹介する。

「巻頭言」は、毎号、会員病院の管理者に執筆していただいている。各機関の図書館担当者が入稿の窓口となることで、管理者の方に協議会および会誌への理解を得る機会となることを期待している。

現在「病院図書館」は年4回の季刊発行である。できるだけ毎号「特集」を組むようにしており、2号では、毎年3月に行われる協議会の総会記念講演を含む総会報告を中心に協議会会員名簿、会則も掲載している。

「シリーズ」で掲載しているものは、読みやすく、気楽に学べることを目的としている。「臨床に役立つ雑誌」は、1992年12巻1・2号より、会員機関の医師に依頼して、専門分野の雑誌に関する執筆をいただいていた。医師の雑誌へのこだわりなどを垣間見ることができ、病院図書館員として大変興味深い内容となっている。だが、この企画は、2002年22巻4号で最終執筆とした。今後、医学雑誌に関する取り組み方を考えて、新たな企画が出せればよいと思

う。

「What's EBM?」は、2001年21巻1号から京都大学の中山健夫先生に、毎号執筆いただいております。EBMを楽しく学ぶことができる人気コーナーとなっている。

「相互貸借のための便利ノート」、「いますぐ役立つホームページ」は、編集部員が執筆を続けてきており、担当者の身近なテキストになっているのではないかと考えている。

「会員紹介」、「図書館員の四季」は、会員が自由に執筆できるページで、ネットワークの情報として身近に感じていただきたい。

「図書館員の掲示板」には、会員の異動やお知らせを、また、「報告」には、研修部行事や全国で開催される企画の参加報告などを掲載している。他に、年4回開催される「幹事会報告」を掲載している。

「文献紹介」は、部員が選んだ興味ある雑誌記事の紹介である。読者の方々からの投稿をお願いしたい。

「投稿規定」、「参考文献記載規定」は毎号掲載している。

III. 企画編集への取り組み

「病院図書館」の編集には、平成15年度現在11名の会誌編集部員が携わっている。年4～5回の部会にて、企画編集の立案を行っている。

編集部における企画の目的は、特に次のようなものである。

1. 協議会の現状を会員へ伝達すること
2. ニュースやトピックスを扱うこと
3. 管理者の興味を引く話題を扱うこと

4. 読み物としての楽しさを出すこと

さらに雑誌の編集方針や掲載記事は、時代にマッチしたものでなくてはならないと考えている。また、病院図書室の現状に合ったものでなくてはならない。

特集企画の決定については、アットホームな部会が、いつしか言葉の修羅場にも変わることもしばしばである。意見の出ない会議が、いつしか意見が出過ぎる会議に変わり、特集名の言葉ひとつにも長時間を費やすことがある。そのとき、妥協することが一番と考えるのは、部長だけかもしれない。企画の妥協はしないが、明らかに、楽しんで言葉を選ぶ会議の風は、大変心地よいものである。

編集には、著作権のことを考えずに通り過ぎることはできない。重複掲載の確認、参考文献に掲載される雑誌の確認、Webに掲載された記事の転用許可の有無など、大変難しい問題も山積している。

また、専門分野の方への原稿依頼において、初対面でVIPの先生方に依頼するときは、さすがに緊張する。企画の趣旨をお話し、編集企画へのご理解をいただくのは、執筆前の大切な時間であり、その後の編集部内での進行にも大変影響するものである。スムーズにご承諾いただけると、一気に気分が晴れ、ほっと胸をなでおろすこともしばしばであった。

IV. 「病院図書室」から「病院図書館」へ

本誌は、1980年3月25日発行の「病院図書室」Vol.1 No.1から会誌として発行されてきたが、2000年20巻を機に、誌名を「病院図書館」とし、現在の装丁に変更した。「図書館」という概念に当てはまる会員機関が少ないという意見もあったが、資料提供から管理運営まで、一般図書館業務と何ら変わらないことから、病院における図書館として、胸を張ってその名前を付けることになった。

装丁の色使いは、会員機関図書館の雑誌架に並ぶ雑誌の顔を見ながら検討したが、個々の装

丁が、それぞれの雑誌の特徴を出しており、当協議会のカラーは何かなど検討を行った。趣味的には、さまざまな意見があると思うが、我が「病院図書館」の新装丁には、満足している。

記事内容においては、病院における図書館業務への誇りを持ち、志高く、欲張っているいろいろなことを盛り込むこととしている。部員全員が意見を出し合い、自由な発想で工夫をしていきたいと思っている。

会員以外の方が、購読会員として「病院図書館」を読んでもらっていることに、身の引き締まる思いがしている。広告協力いただいている、多くの業者の方々に支えられていることにも、感謝している。

V. 投稿規定と編集の手引きの改訂

2000年5月に「投稿規定」および「参考文献記載規定」の改訂を行った。投稿規定に対する思い入れは、妥協を許さず行っている。著者のことを考え、また、読者には読みやすい、統一された論文形態で提供するためのこだわりは持ち続けたいと思っている。

2001年10月には、編集部における「編集の手引き」の改訂を行った。編集者としての心得を、部内で統一することが目的の1つであった。編集の流れを理解し、自分たちのすべきことを確認し合った。また、文字の使い方への統一を図り、校正チェックを正しく行うことが2つめの目的であった。

20巻から、編集部員おのおのが担当を持つこととし、校正作業も分担して行った。校正作業は、特に統一性が大切であり、疑問点は部会を出し合い、その都度、調整し、統一を図っている。

「用字・用語」については、今後も疑問点を出し合い、申し合わせをしながら統一レベルを維持していく。意味のある記事づくりに少しでも近づくことを目的に、当編集部における基準を設けていくことは、今後も必要である。

その基準を部会で確認しながら、査読を行っ

ている。部会までに、各担当者に届いた原稿は、部員間の e-mail で配布し、全員が査読をする。そこで、意見交換がなされ、担当者は著者に編集部の意向を伝え、企画側と著者の意図するところの調整を行っている。編集方針と著者の意向が、上手く統一されたときは、なんともすがすがしい気分である。

VI. 編集部長の思い出

前編集部長であった前田元也氏の後、がんばれば何とかなんとかなるとの安易な考えと、自分たちに必要な雑誌にしたいとの思いから、自分の今を見、欲するものを考えながら特集の企画をしてきた。この考えは、間違いではなかったと今、振り返っている。がんばっていろいろなものに手を出してきたが、内容が難しいと言われても、「それくらい常識」と意気込んで跳ね返した後で、言葉の使い方を見直す時間を失っていたことに腹立たしさを覚えることもあった。

実際の編集作業は、なかなか企画どおりにはいかず、大変な誤算も生じるものだど悟った。特集名の変更をせざるを得なかったこともあり、多くのハプニングの中から生みの苦しみを味わった。しかし、優秀な部員に恵まれ、原稿段階で充実した会議を持つことができ、スムーズな発行ができるようになった。当たり前のことではあるが、ボランティア精神の旺盛な者でなくては、また、編集への情熱がなくてはできるものではないとも言えよう。

VII. 開業医への情報提供

今、私は地域医療連携室におり、病院と地域の医療機関との連携について毎日考えている。

最近、若くして開業される医師が多くなっており、卒後15年程度で、開業医として地域医療に携わる医師もいる。

当院地域医療連携室では、研修機関の1部門として、当院図書館情報を開業医に提供してい

る。特集記事情報や文献の代行検索を行っている。来院して利用する開業医の数は、月1名程度であるが、当院に病院図書館があることへの期待は大きいと見ている。これらの業務が院内管理職に認められ、地域への有効利用推進が進められている。

病院図書館員として、職員対象の文献検索能力だけではなく、地域医療の医師に対する文献提供業務が必要となりつつある。

会誌としても、このような病院図書館環境の変化に、広く対応すべき編集企画が求められ、時代の流れを読み取ることが必須となってきていると考える。

VIII. 編集の醍醐味

図書館員として、文字に興味を示し、文章を書くことは、業務においても必要なことと考える。

「病院図書館」は、機関誌であり、気軽に投稿できる雑誌である。自分のスキルアップへの突破口としても、当会誌を利用していただきたい。研究論文に限らず、自らの事例をまとめてみるのも良いことである。自分の論文が掲載された雑誌を、持ってみてはどうだろう。また、会誌の編集作業に興味があれば、会誌編集部での編集作業をしてみたいだろうか。

会誌が、原稿から印刷物としてでき上がる過程に関わることは、大きな充実感を与えてくれる。どんな郵便物よりも、「病院図書館」の新着号を開封する時の緊張に勝るものはない。しっかりと見直したつもりでも、ミスが見つかり、自分の未熟さを痛感させられる。「次の号は完璧に！」と奮い立たされる瞬間でもある。この感動と充実感を、多くの会員の方々にも味わっていただきたい。

最後に、4年間、未熟な部長にお力を貸していただいた部員の方々に感謝したい。そして、増田徹新部長のご活躍に期待したい。